



# なごや「聖歌」だより 3月号'09

## 大斎——修道院のあじわい

修道院は不思議なところで、数日間滞在するだけでも、圧倒的な自然、単調な生活、祈りのサイクルと修道士(女)たちの真剣な祈りに支えられて、自分がいかに神から遠ざかっていたかが、まざまざと見え、心が神の国へ引き寄せられてゆきます。残念ながら日本には修道院がないので簡単に行きませんが、大斎はそれを居ながらにして体験できる貴重なチャンスです。

早課、時課、晩課、晩堂課など時課経のサイクルに従って毎日長い祈りが行われます。ユダヤ教の時代から受け継いだ祈りの時間の伝統です。日本の教会では早課から時課、晩課までを午前中に行い、晩堂大課を夕刻に行うところが多いでしょう。淡々と続く聖詠の読み、時折祈られる静かな連祷とシンプルな聖歌、単調なリズムに身を浸してゆきます。

旧約聖書が毎日読まれ、聖師父たちの作った歌によってさまざまな角度から聖書のテーマが解説されます。早課のカノンの多くはコンスタンティノープル郊外にあったスティウス修道院の院長フェオドルと修道士聖イオシフが書きました。第1週目に晩堂大課で歌われる「聖アンドレイの大カノン」はエルサレム郊外の聖サワ修道院の修道士だった聖アンドレイ(後に主教)が書いたとされます。聖師父の解説は「歌」です。神の光は彼らの心を照らし、それが歌となってほとぼしりでした。私たちの心と口も、歌うとき同じ光に照らされます。

大斎は「義務」ではありません。食べ物の節制も、何度も繰り返される伏拝も、地味な聖歌も神が聖師父たちを通して私たちのために用意してくださった旅の持ち物です。神のガイドに素直に従って旅を続けてゆけば、その向こうには心を洗う涙、たとえようもなく美しい神の国の光が待っています。



## 聖歌練習

♪名古屋: 毎主日の聖体礼儀後、復活祭の練習を始めます。今年の復活祭は4月19日です。

〇8日代式後に復活祭の練習。

復活祭の練習をします。聖体礼儀後にも練習しますが、まとまった練習ができるのは今回のみです。聖歌を歌うことは神への奉仕です。できるだけ準備をしましょう。

♪半田: 3月4日(水) 大斎祈禱のあと。

2月は都合でお休みしました。

### 3月の指揮当番

1日	ビーメン松島	22日	マリア松島
15日	エレナ広石	29日	エレナ広石

## ズナメニイ研究会 再開 4月から

半年間お休みしていたズナメニイ聖歌の研究会を再開します。内容としては、五線譜とクリュキー(記号)の両方が書かれた資料を手引きに、記号の読み方の練習、19世紀に採譜され四角音符で記録された聖歌集からスラブ語と日本語で歌ってみる、ズナメニイ聖歌を通して正教会の伝統的音楽観、霊的な意味などをゼミ形式で学んでゆきたいと思えます。月1回。日時は来月号でお知らせします。

今まで学んだ内容はインターネットで公開。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameniy/>

ズナメニイ聖歌とは:

ビザンティンから正教を受け入れたロシアでスラブ語聖歌として10世紀から17世紀頃まで発展した主に単旋律の聖歌の総称。クリュキー(鉤)という記号で記譜される。ロシア合唱聖歌は17世紀以降西洋音楽の影響下で和声化されたもの。

ズナメニイ聖歌、ビザンティン聖歌などチャントと呼ばれる古い聖歌は西洋音楽とは全く異なる思想に基づいて作られており、イコンや聖堂建築などの考え方や密接に関係する。

19世紀末から20世紀初頭の一時期を除き、ほとんど忘れられた存在であったが、近年正教会の伝統聖歌としてその価値が見なおされ、至聖三者修道院(トロイツキー聖堂)、アンドロニコフ修道院などで歌われており、アメリカなどでも研究実践が進んでいる。



## 大齋の旅発、 「アンドレイの大カノン」

アレクサンドル・シュメーマン著「大齋」から抄訳

「クリトの聖アンドレイの大カノン」は大齋の最初の4日間晩堂大課で歌われます(第4週木曜日早課でもう一度通しで行われます)。罪の深さと広さを教え、絶望と痛悔と希望でたましいを揺さぶる痛悔の哀歌です。アダムとエヴァ、パラダイスと陥落、族長ノアと洪水、ダヴィード、約束の地、ハリストスと教会—聖書のテーマに罪と痛悔が織り込まれ、聖史のできごとが「私の」人生のできごととして顕されます。聖書に描かれた罪と裏切りの悲劇は「私」の悲劇として歌われ、「私」の人生は、神とそれに逆らう闇の力との壮大な戦いとして示されます。

カノンは「私」の歌から始まります。

我が不當なる度生の行を泣くは何より始むべきか、ハリストスよ、我が今の歎は何を以て起すべきか、(私の無惨な人生の行いをどこから嘆き始めようか。ハリストスよ、どこから私の嘆きを起こそうか。)

「私」の罪は人間の神との一連のドラマとして顕されます。人間の陥落は「私」の話です。

我誠を犯すを以て初めて造られしアダムに效ひて、我が諸罪の爲に、己が神と永遠の國と福樂より遠ざけられしを覺えたり。(私は最初に造られたアダムの犯罪を自分のものにした。罪によって、神と王国とその至上の喜びを脱ぎ捨ててしまった。)

私は神からいただいた贈り物のすべてを失ってしまいました。

救世主よ、我が肉體の衣を汚し、爾の像と肖とに囚りて造られし者を緇ませり。我諸慾の樂にて靈の美しきを黯くし、我が智慧を全く塵と爲せり。(救世主よ、私は体の衣を汚し、神の似姿をどす黒いものにしてしまった。私はたましいの美を暗ませ、智慧を塵芥にしてしまった。)

我は我が始の衣、造物主が初に我が爲に織りし者を裂けり、故に裸體にして臥す。(私は最初の衣、創造主が私のために織ってくれた衣を裂き、裸で横たわっている。)

アンドレイの大カノンは大げさで、聖書のエピソードの積み込み過ぎ、カイン、アベル、ダヴィードやソロモンなどを引き合いに出さずとも、なぜ単に「私は罪を犯した」と言わないのか、と言う人がいます。現代人は聖書やキリスト教の伝統が教える「罪」の深い意味を理解せず、罪の告白(痛悔)をキリスト教の「悔い改め」とは全く異質なものにしてしまいました。現

代文化は罪の意識を失っています。人を「上から」ではなく「下から」定義します。人生を物質的なものだけで考え、本来人間に与えられていた上からの超越的な使命を見失っています。罪は社会的な理由による不適応や当たり前の「弱さ」と考え、よりよい社会や経済機構によって消滅されると考えます。現代人は自分の罪を告解しても「悔い改め」ません。

「罪」とは至と高きところからの落下、神の「高き呼びかけ」を人間が拒否することです。自分のなかに「筆舌につくせない栄光のイメージ」を見て、それを自分が汚し、裏切り、捨ててしまったことに愕然として悔い改めることです。悔い改めは人間の意識の底の底から沸き上がる悔恨です。帰りたい、神の愛と憐れみにひれ伏したいという願いです。罪の深さを理解し、その悲しみを自分のものとして経験して初めて痛悔は意味をなし有効になります。

聖書は罪と悔い改めと赦しの物語です。大カノンは、罪の定義や列举するのではなく、聖書の偉大な物語に思いを深く巡らすことによって罪とは何かを教え、私たちを痛悔に向かわせます。

イススよ、我アウェリの義徳に倣はざりき、爾に何時も、容れらるべき獻物をも、神を悦ばず行をも、潔き祭をも、無玷の生命をも獻ぜざりき。(イススよ、私はアベルの義を身につけず、あなたに受け入れられる捧げものも、神聖な行いも、純粋な犠牲、傷のない生命も献じていない。)

最初の捧げ物の物語を我々自身の根源的な問題として理解します。罪は生命(いのち)の放棄、神への捧げもの、犠牲としての生命を放棄することです。生命の向かうべき方向を誤ること、愛の逸脱です。

大カノンは私たちの人生にとってなぜ聖書が大切かを教えます。聖書は信仰の源です。私たちはどのようにこの世に向かい、そこで生きるかを聖書から学ばねばなりません。そのためには教会の礼拝以上のものではありません。礼拝は聖書の教えを伝達するだけでなく、生命の道を聖書の視点から明かします。

ものいみの旅は「出発点」へ戻ることから始まります。天地創造、陥落、あがない、世界のすべては神について語り、神の光栄を映し出しています。人は人生の本当の広がりを見、悔い改めを知ります。

参考資料: A. Schmemmann, *Great Lent*, SVS, "Lenten Triodion" F & F

アンドレイの大カノンは、明かりを落とした聖堂の中央に司祭が立ち、司祭がひとつひとつ痛悔の歌を唱え、会衆は「神よ、我を憐れみ、我を憐れみ給え」を繰り返します。痛悔の歌は嘆きの歌ですが、神への希望に裏打ちされた力強さ、明るさがあります。

※今月は大齋特集で「聖詠に親しむ」はお休み

### ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>  
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料